

びわこの 考湖学

38

日本列島における東西交通の要所に位置する近江国は、江戸時代には江戸幕府が整備した五街道のうち東海道と中山道の主要街道をはじめ、北陸とを結ぶ北国街道が通り、

また風物が取り上げられています。特に、道端に建てられた道標などの石造物に興味を持ったようで、そこに刻まれている文字などを詳しく記録しています。

参勤交代の大名行列や伊勢参詣など、多くの旅人が行き交っていました。現在でも県内各地に残された古い街並みや、街道沿いに建てられた石造の道標や常夜燈などから、往時をしのぶことができます。

具体的にくつかの事例を見てみますと、『改元紀行』に「左に逢坂常夜灯四ツばかりたり」と記された常夜燈は、そのうちの2基を現在も大津市大谷町と同市逢坂付近の国道1号沿いで目にすることができます。

江戸幕府の役人であった大田南畝(別名「蜀山人」とも号します)は、文人として多くの文章や狂歌などを残していますが、大坂の銅座への勤務を命じられて、享和元(1801)年に江戸から大坂へと東海道を旅します。そして、1年間の任期を終えた翌年には中山道経由で江戸へ戻りますが、この往復の道中記である『改元紀行』『壬戌紀行』には、街道沿いのさまざま

また、『壬戌紀行』には、武佐宿(近江八幡市武佐町)に関して「左に佐々木杜へ十九町と云石表あり」という記述がありますが、この道標は昭和30年代に、安土町の沙沙貴神社境内に移設されて保管されています。そこに刻ま

街道の石造物

瀬田唐橋東詰に現存する寛政12(1800)年の道標。大田南畝が「右に田上山不動寺へ二里半といふ石表あり」と紹介している
|| 大津市瀬田



た銘文から、佐々木一族である豪商三井家の三井高業が、安永8(1779)年に一族の氏神である沙沙貴神社への道を示すために建てた道標であることがわかります。

この道標は製作した石工の名前が刻まれている点で、とても珍しいものです。そこには「石工 京白川 太郎右衛門 田上□□治兵衛」(□は風化して読み取れない文字)と、2人の石工の居住地と名前が刻まれています。

東海道の瀬田唐橋東詰に現存する寛政12(1800)年に建てられた道標には、『壬戌紀行』に「右に田上山不動寺へ二里半といふ石表あり」と紹介されています。大田南畝は道標が示す行き先についてしか記していませんが、こ

江戸時代の石工は、石造物を作るのに適した花崗岩などの産地周辺を居住地とする場合が多く、「治兵衛」が居住していた大津市田上地域は、木戸村や荒川村といった滋賀

郡北部(旧志賀町)の村々などとともに、近江南部における石造物の代表的な生産地のひとつでした。

大津市石場は、石材の産地ではありませんが、享保19(1734)年に膳所藩士寒川辰清が上梓した地誌である『近江輿地志略』によれば、かつて石工が多く住み、浜辺に石が積み置かれていたことが地名の由来とされています。

実際、大津市内や琵琶湖を隔てた草津市内には、石場の石工の刻銘がある江戸時代の石灯籠などが現在も残されており、石材の産地から離れた都市在住型の石工として活躍していたようすがうかがわれます。

街道沿いや神社の境内など、身近なところに残された石造物に刻まれた文字からは、それらの建立にかかわった人々の思いや暮らしの一端を読み取ることができます。時には大田南畝のように足をとめて、道端の石造物などを通して歴史を体感してみてもいいのではないでしょうか。

旅人らの往来しのぶ

(滋賀県文化財保護協会 田井中洋介)